

使命の純粹さと誤ったセクト的全体

— E. フロム『自由からの逃走』を手がかりにして —

近 藤 良 樹

1. 人の本源的社會性

昨年神戸の大震災では、ボランティアの活動が目立った。利己主義のほびこるこの世の中に、無償で、人の役に立ちたいと、全国から有志が集まった。ひとが、愛他の精神にあふれ、社会的な生きがいを求めている存在であることをあらためて示したと言える。ボランティアは、社会的存在としての人の本性を満足させるが、かならずしも各人の個性的な能力を生かすものにはならないし、また、生活の糧は別のところに求めなくてはならない。その点、「使命」になると、本人の秀でた能力が社会から求められ、かつ、しばしば生涯をそれにかけることのできるものとして、そのやりがい・生きがいは、ボランティアの比ではない。ひとの社会的本性をみだし、個人の存在理由をしっかりと与えるものとしては、「使命」にまさるものはないと言ってよいであろう。

大震災の直後、例のオーム教の一連の犯罪が発覚したが、それはまたそれで、社会的存在としてのひとのあり方を猛省させるものであった。教祖の指示のもと、信者たちは、人を殺し毒ガスをまくといった狂気のきたを、おそらく「使命感」をもってやったのではないかと思われた。その特殊な全体のなかで自分の能力を生かして献身的に「使命」を果たそうとつとめていたように見受けられた。だが、それは、みごとに悪用された。使命の弱点として、所属する全体（支配者）への盲従の傾向性があげられるが、それがオーム教の犯罪にも端的に現われていた。

個人主義をいくらすすめても、それだけではみだされぬものが人には残る。

人は、社会的全体のもとで他者と共に生きていくことを切望する存在なのであろう。おろかしい全体に引き込まれて安易なやすらぎを得ながら、それから与えられる使命を担って悪行を率先して行なうようなことにならないためにも、使命とその全体についてしっかり考えていくことが必要なように思う。全体といえば、国家とか民族が想起されるが、「お国のために」「民族のために」という戦士の使命感も、その自己犠牲の純粹さとはうらはらに、しばしばむなしの結果をもたらしてきた。そのようなことへの反省にもつながることとして、使命における全体と個人の関係がどうなっており、いかようにあるべきかが問われる必要がある。先に筆者は、使命の全般を分析したが（『使命論の試み—全体に生きる個の一形式—』（『倫理学研究』（広島大学倫理学研究会）第9号（1996年）を参照ください）、本稿では、使命にとっての「全体」というものを少し考えてみたいと思う。

2. フロムのいう「自由からの逃走」

E. フロム『自由からの逃走 Escape from freedom』（1941年）は、ファシズム台頭をゆるした現代人の精神的基盤を問題にして、自由を与えられた近代の人々が自己と自由を放棄して、「自由からの逃走」をしてしまったと批判しているが、かれのこの見方は、使命を考えていくうえで、急所をつく指摘になるように思われる。「自由からの逃走」は、使命のアキレス腱である。今回のオーム教のばあいも、使命感をもっていたであろうエリート信者たちは、その全体を担う邪悪な教組のもとに自分たちをなげだし盲従してしまい、各人の自主的な自由な判断は停止して、凶悪な犯罪にとのめり込んでいったのであった。フロムのいう「自由からの逃走」、全体（その指導者・支配者）への逃避・盲従は、使命のもとでは、繰り返してあらわれる、陥りやすいわなであるように思われる。

さて、フロムは、「人類の歴史は、増大する個性化の歴史であり、さらにまた、増大する自由の歴史でもある」¹⁾という。ひとは（個人の成長もそれをくりかえすのだが）、まずは、自然的な「第一次的きずな primary ties

(bonds)]²⁾のもとにあって、安定した「全体 whole」³⁾のなかに、悠久のときを過ごす。たとえば「中世の秩序」がそうで、そこでは、「個人は固定した秩序のもとで、確固とした場をもっていた」⁴⁾のであり、しっかりとした帰属感・安定感をもっていた。が、やがて、そのきずなから解放され分離して、個の自立の方向へとむかう。この分離・独立は、自由になるということだが、フロムによると、それだけでは、ひとは、単に解放されるだけの消極的な自由にとどまり、はじめの自然的なきずなのもとでの安心できる帰属感や安定感を失い、「孤独と孤立」の感情をいだき、「不安」⁵⁾な状態に陥ってしまうのだという。

問題は、ここからで、自然的なきずなから解放された、この（消極的 negative）自由の孤立・不安な状況からの歩みが、二通りに分けられるとフロムは主張する。一方は、これに耐えながら個人の真の自立・独立を勝ちとっていき、「積極的な自由 positive freedom」⁶⁾の道であり、力と自信をもって、所属の社会に生きていくもので、「愛と仕事」「すべての人間との連帯 solidarity」の道⁷⁾である。もうひとつは、これがファシズムへの道でもあり、使命を考えるうえで、欠かすことのできない「他山の石」であるが、せっかく自由が得られたのに、「孤独に耐えられないので、自我を失う方を選び」⁸⁾、自己を放棄する、「自由からの逃走 escape from freedom」の道である。

この逃避の道は、自立できないで「第二の」「新しいきずな」⁹⁾を求める道であり、それは、第一のきずなのもとにあったような「服従 submission と支配 domination」¹⁰⁾への退行の道である。それは、神経症的退行とか宗教にも見いだされるわけだが、フロムは、この逃避の当時の社会的大道としては、ファシズムにおける「指導者への服従」と、民主主義のもとでの「強制的な画一化 compulsive conforming」¹¹⁾をあげている。本稿では、使命論に引き付けるために、これを、権威的な「全体への逃避」にと、まとめておきたい。自由からの逃走は、原初的全体からの分離によって生じ、その消極的な単純な退行的解決は、孤立をさけて第二の「きずな」へ、「全体」へと退行することであろう。そのかぎりにおいては、フロムのいう自由からの逃走を、「全体への逃避」としておいても、そんな外的外れになるわけではないと思う。

3. フロムのルター批判

「使命 Beruf」論というルターが想起されるが、フロムは、直接的にはルターの使命論を主題とするわけではないが、そのことをふくむルターの主張を、「自由からの逃走」という視点からみて批判していく。

ルターのプロテスタントは、カトリック教会から権威を奪い去り、まずは、中世的束縛から解放し、個人に独立を与え（消極的）自由をえさせることをした。カトリックは、個人を「集団の不可欠の部分」¹²⁾とし、教会という権威のもとにしばりつけていたが、同時に、それは、安定したものとして、孤独とか不安からひとを守ることになっていた。ルターやカルヴァンは、そういう中世的な教会・集団の束縛から、個人を解放したわけだが、それは、同時に、ひとを孤独にし、無力を感じさせ、不安にし無意味の感情に陥れることになったのである。これからのがれるために、教会の抑圧から解放するとともに、同時に、神のもとへの「完全な服従」と「個的自我の滅却 annihilation」¹³⁾をルターたちは求めた。つまり、真の自由・独立にむかうのではなく、この自由から逃走して、神のもとに直接たたせて、これに盲従させることになったと、このようにフロムはいう。ひとの自主独立ではなく、反対に「神の手のなかでの無力な道具」となり「召使」になることを求め、むしろ、人から「自己確信と人間の尊厳の感情をうばった」¹⁴⁾のだと、ルターを批判的に捉えている。

ルターのいう「使命 Beruf」は、神から与えられる各人の世俗の「職業 Beruf」であった。フロムが神の無力な「道具」「召使」といっているのは、この神からの「使命」をさし、これを批判的に見ているのだと解してよいであろう。ルターが人の自信や尊厳の感情をうばったというのは、世俗の職業を下賤ではなく、聖職と同様に神聖なものと見なおした彼の使命論には、すこし厳しすぎる批判ではあろうが、価値・目的は、神にあったのだから、高所から判定するならば、そういう面をもっていたのはたしかであろう。

つまりは、プロテスタントが世俗の職業を「使命」ととらえたのは、使命のきずなによって、神という全一の支配者に一途につかえ、ひたすらにそのいい

なりになり、「自由からの逃走」をし、これに盲従することを求めるものに他ならなかったということである。使命においては、これを命じる全体（とその支配者・命令者）に対して、しばしば盲従的になる。宗教においては、とくにそのことが顕著となる。知的反省を停止した信仰心は、盲従を徹底させる。その支配者が邪悪なばあい、どんな凶悪な犯罪・事件に手をかすことになるかは、オーム教のみならず過激な宗教において、しばしば問題となることである。

フロムは、全体（神）のもとでの「道具」「召使」となることに批判的だから、全体の部分となる「使命」そのものを否定的に見ているのではないかと思われなくもないが、それは、自由を放棄してそうなることを否定しているのであって、部分になって生きることを否定しているわけではない。かれが求める理想は、自立し自由になって、全体の有効な部分となって生きていくことである。「自由でありながらも孤独でなく、批判的であっても懐疑で一杯というのではなく、独立しつつも人類の不可欠の部分（integral part）として存在できること」¹⁵⁾を求めているのである。

全体の有機的で有力な部分として生きる使命は、フロムでも、ひとのありかたとして、求められていると言ってよい。しかし、それがしばしば陥る全体への逃避・盲従、つまり「自由からの逃走」だけは、さげなくては、せっかくの使命も、だいなしになり、悪魔の手先にさえ墮す可能性のあることを指摘しているのだといってよいであろう。

4. フロムの妥当性

かれの「自由からの逃走」の主張は、直接的には「使命」を論じたものではないが、そのことをも含んだ自由な存在としてのひとのあり方を論じていて、端的に使命の急所をつくものになっているように思われる。その主張は、主要には「人の社会史」について、その歩みを、人の個性化・自立化の過程として、自由獲得の道と見ていこうとするものだが、これは、個人の成長のあり方なのでもあった。フロムは、そういう社会史と「同じプロセス」を「個人の生涯 life history」にも見ることができるといふ¹⁶⁾。成長した個人は、社会的

全体のなかにあって、自主的自立的に生きていくわけだが、よりかかれる全体があると、自立・孤立に弱いひとは、幼児的方向へ退行して、この全体へと埋没してしまい、「自由からの逃走」をしがちとなる。使命を担う者でいえば、全体によりかかってしまい、自主的な判断を停止し、命じられるままに妄動していきやすいということになるのである。

使命を担う者は、帰属の全体に一体感をもち、これに尽くしていこうとする。その全体は、そこから見ると問題があっても、使命感をもつものには、他にかえがたいものであり、その与えられ命じられた使命を、崇高なものとして、これの達成には、しばしば命すらもかけていこうとする。ここには、その全体への批判的な姿勢はないと言ってもよい。その全体と距離をとって、自立した個人として批判的にこれに対処していこうという姿勢は、そう簡単にはとれないのが普通である。フロムのいう「自由からの逃走」状態がそこには生じやすいのである。そして、その自由の放棄・無批判的盲従によって、崇高な使命は、ときに犯罪的行為へ加担してしまうのである。悪いのは、全体の支配者・リーダーだといえば、そうなのだが、それにやすやすと乗せられてしまう方も、無防備で無反省で問題なのである。

自由を守り、自らに自己の行動の責任をとって、自主的に行為をなす姿勢をもっておれば、つまりは、フロムのいう、自立したものの「積極的な自由」をもっているならば、邪悪なものの犯罪に加担することなく、これをきっぱりと拒否できるはずなのである。使命をひきうけて、命をもかけて献身していこうという崇高な態度をもった真摯な者であれば、ばあいによると、邪悪な意図をくじくための勇敢な行為に出る可能性さえもつ。「自由からの逃走」がなければ、その犯罪的な全体には、与しなかったのであるし、みんながそうであれば、犯罪集団そのものが成立しなかったはずなのである。ここでは、「自由からの逃走」は、ひとつの犯罪集団の全体を成立させた大きな原因の一つになっているのである。

フロムにおいて、「自由からの逃走」の道ではなく、もうひとつの、積極的な自由の道は、全体からの分離に耐え自立した者の、「愛と仕事」「連帯」の道

であった。それは、使命に関して理想的な状況になる。使命を担った自立者は、愛をもって、みんなと連帯しつつ、創造的な活動をしていくが、その際、決して「自由からの逃走」はせず、盲従を拒否し、自立者として自主的に自由に判断し責任をとっていくわけである。

5. 使命にとっての全体

ところで、フロムのいう「自由からの逃走」をもって、使命の担い手が帰属の全体へ逃避・盲従していったからといって、ただちに犯罪に結びつくわけではない。穏健な宗教に帰依して、世のため他人のために生きようという方が、ふつうのことで、一部の過激な宗教が行なう犯罪は、むしろ、まれであろう。だが、ときには、というか邪悪な全体（の支配者）が出てきた場合には必ず、オーム教のように、そこでの盲従者は、犯罪に手を染めていく。使命感にあふれるものは、そういう全体のもとでは、百パーセント犯罪者に身を落としてしまうのである。使命にとってのこの全体について、次にすこし見て行きたいと思う。

使命感をもって、自己をそれに尽くそうという全体は、当人がそれに所属感をもっている全体であって、全体ならなんでもよいというのではない。その全体が当人から見ても、疎遠なものとか抑圧的に感じられていた場合、これに尽くして使命を担おうとは決して思わないであろう。使命にとっての全体とは、自分が犠牲になってもよい自分の全体、いわば「うち」と捉えられる全体になる。自分がそれに喜んで所属し、望んで帰一しているような全体である。この自分の（帰一する）全体のために命をかけようというのであって、一般的な全体のためという愛他の精神にもとづいているものではない（ただし、人類そのものを自分の愛する全体と見なす場合には、人類一般のために使命を感じるようになる）。

自己をそのために犠牲にしてもよいと思わせるのは、その全体が自分をささえてくれ、自分を可能にしてくれているものだからであろう。それは、自分の存在の根拠がそのもとで与えられているような全体である。自己のよりどころ

としての頼りになる全体である。そこにおいて、自分が守られているのであり、あるいは、安心でき、安らげるのである。その全体から自分に使命が命じられるとは、全体との結合の糸がこの全体の方から与えられたということであり、使命を担う者は、その糸を大切にし、自分の方からもしっかりと結びの糸を紡ぎだしていこうということになる。

帰一している全体には一体感情をもつ。その全体が苦しければ、自分もつらく、その全体の喜びは、自分の喜びとなる。それは、もうひとつの自分、大いなる自己ととらえられているのだといえよう。自身は、その全体にとっては、極端なばあい、身体的全体に対する手足のようなものになるのである。手は、身体的全体と一体で、これの手段としてあり、これを離れて自存することは許されない。主体は、あくまでも全体にあり、この全体を真の自己とし、わがこととして、これのために尽くすのである。

あるいは、このように全体そのものとひとつというよりも、その各構成員がもう一人の自分と捉えられている場合もある。ここでは、この自分の献身は、そのもう一人の自分、もっとたくさんの自分のためにするものであり、つまりは、自分が自分につくすという形式をとるのである。わが祖国という全体のためにつくすのであり、かつ、その同胞一人一人を、もう一人の自分と感じて、そういう「自分」の幸せのためにと、すすんで犠牲になっていくのである。

使命を担うものからいうと、その全体は、もうひとつの自己であれば、なにもかえがたいものがあり、その全体には無上の価値を感じているのである。自分がそのために使命を担い犠牲になるのは、いわば大いなる自己のために、あるいは、もう一人の、多くの自分の分身たちのために尽くしているのであって、決してあかの他人のためにそうしているのではない。使命を果たしていく自分は、命を落とすようなことになるかもしれないが、そのことにおいて、全体にと生きていくのである。全体のために自身をつくし、そこへと自己を表現し、自己実現していつているのである。その犠牲・献身は、自己の達成・実現でもある。そういう場が、使命にとっての尊い全体になるのであろう。

6. セクト的全体

ところで、使命を命じる全体は、ふつうには、その担い手が所属している特定の全体になり、そのために献身しようというのだから、使命は、別の全体との関わりからは、きわめてセクト的なものになる可能性をもつ。

その点、使命は、ボランティア精神とは対照的である。後者は、うちそとを問わず、むしろ、そとの者、疎遠なもののために役立つというもので、国境をもたないコスモポリタンであり、博愛主義者になるといい（もっとも、ボランティア立国アメリカのそれは、自分の町に社会奉仕するのが主となっているようである。それでも、自分の町（ポリス）に限定した奉仕をめざしているわけではない）。救助をもとめているところには、地のはてにでも駆けつけていこうというのが、ボランティア精神であろう。ときには使命感も、人類全体の立場から抱かれることがあるが、使命の多くは、自分の依って立つ特定の全体、たとえば帰属の国家のもとの使命になる。それは、決してその外の別の全体（国家とか民族）のために尽くすものではない。対立し敵対的になっている全体同士ということになると、その先兵となるのが使命の担い手であり、そういう場合、他の成員に比して、かれは、きわめてセクト的なふるまいをすることになる。

使命を担うものは、全体的手段となり、自己自身をすすんで犠牲にするものとして、その精神は、端的に反エゴイズムであり、愛他的、利他的である。ところが、それは、特定の全体のためのものであるから、そのそととかそれに対立するものから見ると、愛他的ではなくなっているのである。自分の属する全体にもっぱら尽くすのであって、その外の全体には無関心か対立的であれば、外からいうと、セクト的であり、そのセクト（自分の全体）がよければいいという点では、使命の担い手は、むしろエゴイストになっているのである。

隣人愛にあふれたキリスト教にしても、来日した宣教師たちは、自分に使命をあたえた教団をよりどころにし、そのために献身したのであり、それをこえて、それに対立するものにまで尽くすものではなかった。伝道（使命）の担

い手としてのかれらは、仏教教団に愛の精神をもってかかわるものではなかったであろう。隣人を、敵を愛せよとのモットーが気になる者は、仏教僧を人ではなく、サタンと捉え直したことであろう。自己（キリスト教）を主張し、これにしたがわない宗教は排斥したはずである。仏教の方からいうと、かれらのそういうあり方は、セクト主義そのものであったであろう。使命では、こういうセクト主義がふつうのあり方となる。そのよって立つ全体が特定の限定された全体にとどまるのがふつうだからである。

しかし、本質的には、使命の担い手そのものの精神は、決してエゴイズムではない。ふつうの者が利己的に生きるところで、全体のために他の者のために献身し喜んで犠牲になろうとするのである。使命感をもった者は、崇高な愛他の精神にみちあふれた情熱的な存在であり、少なくとも主観的には、無私的で純粹そのものである。問題は、全体の方にある。それがセクト的で偏狭な全体であることで、使命の担い手の純粹な献身がだいなしにされてしまうのである。

7. 有機的全体と粹組み的全体

同じ全体といっても、それとその部分との関係は、ものによってかなり異なってくる。身体的全体とその部分（手足）の関係と、ひとつの森とその木々の関係は、大きく異なる。前者では、全体なくしては、その部分がありえない有機的關係になっていて有機的全体をなし、後者では、部分はそれだけでも存立することが可能で、その全体は、単に諸部分が寄せ集められたのみの、希薄な集合的・粹組みの全体になる。セクト的になりやすいのが有機的全体のもとの使命になることはいうまでもない。

その全体が動物のからだのようなものであれば、有機的になる以外ないのだが、ひとの集団では、同じ類の全体であっても、これを構成していく各個人の特性からして、その全体が有機的なものになるかどうか違ってくることがある。同じ宗教でも、新興宗教のばあい、個人をつよく引きつけしぱりつけて、有機的な全体になることが多い。その全体に信者は深く帰一していて、他の全体とのかかわりでは、つよくセクト的になる。セクト的にふるまうことで他から拒

否されると、ますますセクト的になり、かたくなにこれに結びついていく傾向がある。ここでは教組が邪悪なばあい、信者は、とんでもない使命を実行してしまう。その点、既成宗教は、単なる集合的な全体により近く、わが国の町や村の神社は、多くは、町内会をまとめるだけのたんなる枠組みの全体ではない。ここでは、リーダーがよからぬことを命令したときには、信者は、したがわれないのみか、かれをリーダー役からひきずりおろすことにもなりかねない。誤った使命を持たないということでは、こういう宗教は、都合がよいわけだが、宗教そのものの充実という点では、問題なのではある。つまり、ここでは、一般的に言えば、信者は、信仰心がうすいから盲従しないにすぎないのである。

新興宗教型というか、有機的全体では、使命を担うものからいうと、まず第一にあるものは全体であり、個人の犠牲を安易に求めるものになっていく。全体の命じる使命は、個人的には不合理と映るものも、それは個人の理解力をこえたものだからと、批判の対象にされにくくなる。個人も深く全体に帰依していて自己放棄の度合いが大きく、盲従しやすくなる。ここでは、自分の属する全体は、セクトとは捉えられないことが多い。自分たちの集団は、真の十全な全体と捉えられ、したがって、自らの全体をセクトにと格下げする他の類似のセクトの存在を許すことができず、ときには、これらと生死をかけた戦いをすることになる。

これに対して、既成宗教型の集合的・枠組み的全体の方は、各人の自由に寛大である。全体が希薄だから、各人が自立してということであったり、自立した個人が寄り集まっていくから、全体が逆に頼りないものになっていることであろう。全体は、自立した各人の単なる枠組みとして、希薄な存在であり、超越的でも絶対的な目的でもないということになる。絶対的ではないのだから、自分たちの全体が一つのセクトであることも受け入れることになる。自分は浄土真宗だが、となりは、臨済宗で、どちらもどっちだと冷静でありうる。もちろん、使命を命じる全体に対しては、各自は、その手段であり、犠牲になるべきものであるが、その度合いは、有機的全体の比ではない。期待されたり命じられたからといって、それをうのみにして盲従するようなことも当然少

なくなる。

全体が有機的なものであれ、単なる枠組みの全体であれ、個人は、自立者として、自由を堅持すべきである。新興宗教のばあい、しばしば有機的全体として、個人をしぼり、盲従を求めてくる。こういう全体のもとでは、とくに自立・自由がさげられる必要がある。教組はもちろん、全一の神とか仏であっても、各人は、これらに正面から立ち向かい、ぶつかり、ときには「仏を殺し」「神を殺し」というぐらいのいのちがけの姿勢をもって、自立者としてわたりあうことがなくてはならない。それは、使命に関してのみのことではなく、おそらくは信仰においてもそうあるべきであろう。

8. 誤りうる全体

全体は、個人にくらべて、一般的には、より善であり、より真理を体現していると思われがちである。たしかに、個々人の誤りは、全体のなかでは修正されていく可能性がある。しかし、全体そのものの判定・行動が真理だとか善だという保証は、どこにもない。個人間では正義が通用するが、国家間では、いままって、通用するのは力であって、弱小国の主張は、正義であっても、まず通用しない。歴史は、むしろ、(国家とか宗教の) 諸全体の誤謬と悪の展覧会の感じがすることもあるぐらいである。

使命のよりどころとなる全体も、大いに誤ることのある全体である。セクト的全体であるとは、他のセクトからいうと、誤謬・悪からなりたった全体ではないということである。その誤った全体のために率先して尽くす使命の担い手は、他の全体からいうと、ときには悪魔の手先になりさがっていることになる。

使命のよりどころとしての全体がかならずしも、万全ではないことを、使命の担い手は、常々、注意しておかねばならない。ナチスの全体主義を前にしたアドルノは、「全体は、非真理だ *Das Ganze ist das Unwahre*」⁷⁾とさげんだが、使命では、おそらく常に、このことばを反復しておく必要がある。

個人間の争いでは殺人はまれだが、国家の間の争いでは、しばしば戦争になっ

て、大量殺人を平然と行なう。しかし、だからといって国家のような全体をなくして無政府状態にしてしまうと、おそらく現生人類のもとでは、もっと野蛮な大小の一層セクト的な全体をばっこさせることになる。全体そのものを排除することは、無理な話で、より誤りの少ない全体を求めることができるのみなのであろう。

手足の部分と身体的全体のようなもの場合、手足には全体を統括する機能はないから、頭脳が全体のために手足に命じることをそのまま受け入れていく以外ない。しかし、人の集団の全体の場合、その全体を統括する命令者は、その成員とまったく同一の能力をもったものになる。ちがうのは、命令する部分にいるか、される部分にいるかという位置のちがいのみである。ということは、指導者は、その構成員と同じく誤るものであり、構成員も、指導者と同じく命令する能力があるということである。使命を担うものは、自分が誤りうるし、ときには邪悪な考えにとらえられることを知っているのであれば、指導者も邪悪になるはずなのだとかまえておかねばならない。それへの無批判な追従、盲従は、使命の担い手の怠慢にもなると知るべきであろう。

しかも、全体は、リーダーの意のままにもならない。彼らの意思からも独立した、制御のできない「ばけもの」とさえなる。多様な意見の妥協の産物が全体の指導原理となることもある（もちろん、合議制は、多くはリーダーの個人的暴走を全体において食い止めているのではある）。個人以上に誤り、無原則になるのが全体となる可能性もあるのである。

9. 盲従への歯止め

使命を担うものは、所属の全体につよく一体化していて、それへの盲従を結果しやすい。しかし、その全体は、誤るし、セクト的でもある。使命を担うものは、そのことを、したがって自身の使命の是非を、常々反省していくことが必要になる。

その点で、フロムの「自由からの逃走」論は、「使命」批判に、ラディカルである。使命が悪の手先に陥らないようにするには、自立した個人の自主的な

判断が大切であり、「自由からの逃走」、つまり、使命を命じる全体（の支配者）への逃避・盲従は、何としても避けられなくてはならないのである。全体がたんなる枠組み的な全体にとどまっているばあい、有機的全体よりは、各自は、自主的に自由にふるまいやすい。しかし、それでも、自立精神をしっかりとっていないと、結局は、みんなに流されてしまう。有機的全体は、個人の自立を妨害してくるから、常に、各自は、自立精神を自覚して、これを鼓舞しておくのでなくてはならない。全体に対するとき、各人は、自由を堅持し、自主的に判断し自立的に行為していくという、フロムの「積極的自由」をつちかっていくことが求められるのである。

このことに関しては、さきの拙稿「使命論の試み」の「むすび」でもふれたが、各人が、カントのいう「元首 Oberhaupt」¹⁸⁾ やマルクスのいう「全体的個人 totale Individuen」¹⁹⁾ になるべきだということも言われてよいであろう。全体からの使命の命令も、単に臣民として服従するだけではなく、同時に「元首」として自らにその是非を判断していく姿勢が必要なのである。あるいは、各人、「全体的個人」として、多様多彩なことがらに目をむけ、より広い全体から、冷静に理性的に判断し、かつ、かけがえのない実存・個人として存在するようにつとめておく必要があるということである。

個人のがわでは、そういう自立・自由の堅持が求められるが、他方で、全体自体のがわでも、その組織形態に「自由からの逃走」になりにくいものを求める必要がある。これについては、フロムは、「個人の十全な発展」のための諸条件を創造していくシステムである「デモクラシー」をつくりだしていくべきだと主張している²⁰⁾。民主的組織は、盲従をもとめる専制的組織とちがい、各人がカントのいうように、臣民であるとともに元首なのであり、全体の方針にもみんなが自由に発言していくことができる組織であって、全体の暴走をチェックすることが可能になる。情報の独占もやめてみんなに公開し、各人が各様に全体を思慮し、自発的に全体へと参加していくものとなり、この組織は、自立性をそだてる教育的組織にもなっているのである。

しかし、そういう組織を生かすのも殺すのも、結局は、自由な個人しだいで

あるから、積極的自由のもとでの自立した各人の、しっかりした判断が、主体性が、やはり何より求められるということになる。その点で、アドルノの「全体は、非真理だ」ということばは、全体に献身しようという使命感をもつものの、よくよく噛みしめておくべきことばになる。使命のばあい、これを命じる全体は、通常、真の全体ではなく、ひとつの有限な全体、他から見ると悪と誤謬から成り立ったセクトになっているのである。セクトの悪行に盲従している可能性のあることを、使命を担っている者は、よくよく反省すべきである。

使命の担い手は、自分の帰属する全体と一体で、これをもう一つの自分と見なして「ひいき」している。ひいきするから献身しようということになるのではあるが、いったんは、ひいきをやめ、もう一つの自分とみなすことを停止し、これをつきはなして、豊かな想像力を駆使し多方面から反省して、自他を冷静に捉え直していくことが大切であろう。自分に使命を与えているこの全体は、「非真理」なのだとは一度は疑ってみる必要がある。自分たちのリーダーも、たまたまうえに祭り上げられているから命令しているだけであり、人間的弱さにおいて、各メンバーにけっして負けない存在であることを忘れないようにしなくてはならない。

全体が真理でも善でもないのならば、それを無反省に至上の目的にすることは、愚かしい態度となる。かけがえのない、この実存・個人をもっと大切にすべきである。使命は、全体のために個人を手段とし犠牲とすることをいとわないが、全体は、必ずしも個人を大切にはしない。個人主義・ヒューマニズム・実存主義を、「全体」のまえに常々対置しておくことが必要である。

註

- 1) Erich Fromm; *Escape from Freedom*. New York. 1964 (1st printing, 1941). p. 238
- 2) *ibid.* p. 35f.
- 3) *ibid.* p. 41
- 4) *ibid.* p. 254
- 5) *ibid.* p. 103
- 6) *ibid.* p. 35

- 7) *ibid.* p. 36
- 8) *ibid.* p. 257
- 9) *ibid.* p. 37, 141
- 10) *ibid.* p. 142
- 11) *ibid.* p. 134
- 12) *ibid.* p. 108
- 13) *ibid.* p. 81
- 14) *ibid.* p. 83, 111
- 15) *ibid.* p. 257
- 16) *ibid.* p. 24f.
- 17) *Theodor W. Adorno Gesammelte Schriften*. Bd. 4. Suhrkamp Verlag. S. 55
- 18) *Immanuel Kants Werke*. hrsg. von E. Cassirer. Bd. 4. S. 292
- 19) *K. Marx F. Engels Werke*. Bd. 3. Dietz Verlag. S. 68
- 20) Erich Fromm; *ibid.* p. 274

The pure vocation (mission) and the fallible, sectarian whole

— some application of E. Fromm's "Escape from freedom" —

Yoshiki KONDOH

Man in vocation (mission, errand) has a tendency to follow blindly the whole to which he belongs comfortably, then the vocation sometimes is abused by the bad leader of whole. E. Fromm's "Escape from freedom" gives us the useful suggestion for the examination of this weak point of vocation.

Fromm said that we can get true positive freedom when we are released from the primitive ties of whole by individual or historical maturity, but since it creates anxiety and solitude, we have a tendency to retrograde or to escape from freedom. In the case of vocation, we are apt to go back easily to the whole which commands vocation and demands blind obedience.

I think that Fromm's analysis is very useful for considering the weak point of the vocation which is inclinable to belong dependently to own whole and to obey it uncritically. For the evasion of blind obedience, from the standpoint of Fromm, each must become the independent person who gets positive freedom, not escapes from freedom, not retrograds easily to whole.

By the way the whole which commands vocation may be not true whole but sectarian incomplete whole, namely fallible whole. Especially we must notice that the leader of whole falls into the same errors as his members do.

Consequently we must reflect always our vocation whether it's wrong or not, because it is commanded sometimes by the fallible leader of whole. As not only individuals but also wholes usually are fallible, we must repeat the aphorism "Das Ganze ist das Unwahre (the whole is untruth)" of Adorno who was ill-treated by Nazism. After all, the most important point for infallible vocation is to become independent, free person.